

# 創造性を育み 感性を豊かにする 海城の芸術教育

海城中学高等学校



難関大学に高い合格実績を誇る進学校でありながら、海城中学高等学校では、芸術教育の充実にも力が注がれている。多彩な芸術関連のプログラムによって、どのような力を育もうとしているのか。校長特別補佐の中田大成先生に聞いた。



校長特別補佐 / 教育推進研究センター長  
中田大成 先生

## 歴史の大きな転換点を迎え 新しい価値を生む力が重要に

海城学園が芸術教育で目指していることは何でしょうか。

中田 2つの目的があります。1つ目は創造力・閃き・デザイン（設計）能力の育成、2つ目は感覚・感性を研し、共感・同感能力を育成することです。教育学者・ブルームは、教育目標の分類（タキソノミ）として、知識の獲得↓理解↓具体的な場面への応用↓詳細な分析↓統合↓評価の6階層を掲げています。続く弟子のアンダーソンらは、最後の2つの階層を評価し「創造」と改め、最高位の階層に創造、つまり新しいものを創り出す能力を位置づけています。その創造力を育成する方法として、本校では芸術教育に力を入れているわけです。座学を中心としたこれまでの日本の教育は、分析までの学力は十分に育成することが出来ましたが、ところがそれだけでは創造の階層に届きません。そこを補いなおかつ感覚・

感性を研すことが出来るのが芸術教育だと考えています。  
なぜ今、創造力と共感が重要になっているのでしょうか。

中田 世界が大きな転換期を迎えているからです。グローバル化の帰結として、西洋的近代の価値観、理念、制度、たとえば自由と平等、民主主義、資本主義などに矛盾が生じ、揺らぎしています。トランプ氏の大統領就任、イギリスのEU離脱など、一種のポピュリズム的な排外主義の傾向も見られます。さらに、世界では貧困の格差が拡大しています。以前から南北問題の形で顕然と存在していましたが、ボーダレス化の結果、先進国内でも格差が生じています。歴史的な格差の怨念は、テロの脅威という形で出現しています。こうした歴史的転換期において必要とされるのは、新しい価値や社会システムをデザインし、具体的に実現化できる人材です。つまり、新しいものを作り上げることができ、創造力も重要なのです。その際、世界には格差にあえていられる人々がたくさんいることを認識し、彼らへの共感・同感を持つて、変革をめざせる心が求められるでしょう。

中田 入学してくる最近の生徒を見ると、感受力が著しく低下しています。塾に通い、ゲーム機などのパトナール

な世界に馴染み、生身の人間や社会自然と触れる経験が不足していることが原因と思われる。そこで、本校が着目したのは芸術です。油絵、演劇など、様々な芸術作品を仕上げる際には、身体全体を使います。それによって脳が活性化され、創造性や感受性が豊かになっていくと考えています。

## 芸術家教師の流れをくむ 自由度の高い美術の授業

具体的にとどのような芸術教育が行われているのですか。

中田 美術の授業は、本校の現在の校章をデザインし、後に「太陽の画家」と呼ばれた利根山人画伯が教鞭をとっていた頃からの伝統を受け継いでいます。中1の1学期から全員、静物の油絵に取り組みますが、利根山先生は芸術家らしい型破りな自由人で、生徒に型にはまった描き方を指導することはありませんでした。自分に合った描き方でいいと言われた生徒たちは、伸び伸びと作品を描き上げていく中で、閃きが生まれ、独自の感性、表現力などが磨かれていきます。また、中1の2学期からは自画像に挑戦し、自分と向き合ういい機会になっています。自分の内面を見つめ直すことは、他者や自然を感じようとする心にもつながっていきます。中2以降は版画、塑像、絵画など、多彩な表現方法に触れます。作品を仕上げた過程で、粘り強さや、やり遂げる力も育まれています。

## 感受力・創造力を育む 「ドラマ・エデュケーション」

「コミュニケーション授業の一環で「ドラマ・エデュケーション」というユニークなプログラムもありますね。

中田 演劇的手法を用いた教育「ドラマ・エデュケーション」は、学内では「コミュニケーション授業」という名称で呼ばれていることから判るよう、もともと共生のためのコミュニケーション能力や協働・コラボレーションの力を養うためのものとして導入されました。しかし、現在の授業は当初設定した枠を超えて、新たなものを創り出す創造力や研ぎ澄まされた感性を育む先鋭的な授業になりつつあります。

それはこれらの授業を担当している指導者が、柴幸男氏、多田淳之介氏、山本卓卓氏、吉田小夏氏といった演劇の世界のトッププロであることによります。一流のアーティスト（演出家）である彼ら彼女らは、その巧みな仕掛け・授業デザインによって生徒たちの中から、それまで本人たちも気づかなかったような独自の発想、個性的な表現を引き出します。それはもはやコミュニケーション授業の域を超えています。感性の研磨という点においてはプロの手法によるトレーニングが行われます。たとえば、30〜40人の生徒で部屋の中を歩き回る課題が出されます。他の人とぶつからないこと、空いている空間ができないようにすることが条件です。周囲の人の動きを感じ取って移動する必要があるわけです。

あるいは生徒10人で円を描く形で座り、一人ずつ順次立ち上がり、全員が立つことをめざす課題もあります。同じ瞬間に複数の生徒が立つたやり直しです。これらの課題はシンプルで簡単そうに思えますが、五感で周囲の雰囲気を感じなければならぬので、けっこう難しい作業です。一見何気ないトレーニングを積み重ねる中で、子供たちの感受力は着実に磨かれていきます。そして、それは他者に共感したり、同感したりする能力につながっていくのです。

## 演劇のプロと一緒に 舞台劇を作り上げる

2016年度から「芸術鑑賞の日」が設けられています。

中田 中1から高2までの5年間に「西洋的」×「東洋的」&「過去」×「未来」の4つのマトリックスの多様な切り口で、様々な芸術に触れます。例えば、東洋的×古典芸能は京劇の鑑賞といった具合です。多様な質の舞台芸術に触れて、感じる力を豊かにすることが目的です。鑑賞に加えて、高1では、平田オリザ氏門下の一流の演出家、俳優と希望する生徒たちが一緒に舞台劇をも作り上げました。昨年ユリアス・シーザー」で、練習期間は1カ月で、放課後に練習したのですが、部活動などもあるため、なかなか全員が集まるのは難しく、通して演じられたのは、生徒対象の披露の日が初めてでした（翌日、保護者と教員向けに再演）。

それでも堂々と演じることができたのは先ほどの「ドラマ・エデュケーション」の経験が大きいのと思います。出演していない生徒も、仲間が演じる姿にセリフは生体全員が教室で最初に英文で教わるのですが、シェイクスピア作品ならではのリズムや、韻を踏んだ表現などに触れ、その言葉が身体と同期することに生徒たちは感動を覚えたようです。

失敗や試行錯誤を重ねながら、1つの作品を完成させた経験こそが、自己効力につながり、失敗を恐れず取り組もうとする姿勢を育むのです。その姿勢は舞台のこちら側で芝居を鑑賞していた生徒たちにも感染します。多くの大人が社会の閉塞感に頭を抱えている中で、「自分たちなら変えることができる」という強い意思を持った生徒たちを育てたいと考えています。

中田 作品を作り上げても、それが独善、自己満足で終わったのでは意味がありません。相手に伝わって、初めて価値が生まれますから、実際に演じる経験は貴重だったと思います。評価も重要です。友人や保護者などの喝采を浴びることで、表現の快感と同時に、高く評価された喜びを味わい、それが次の行動への動機づけになっていくのです。もちろん、表現の対象は芸術の枠に留まることはありません。独創的なものづくりに挑戦し、ベンチャー企業を立ち上げたり、法律や行政の世界で社会システム、社会制度の改革に取り組んだり、生徒それぞれの特性を生かして、夢を広げて、幅広い分野で表現力を発揮してほしいと考えています。

様々な社会構造が行き詰まりを見せている中で、自分自身で変えていこうという意欲を生むには、自己肯定感や自己効力が不可欠です。座学で知識として変革の重要性を認識しても、行動に移すことは難しいものがあります。



中1美術・油絵・自画像の制作



中3「コミュニケーション授業」発表会の様子



高1芸術鑑賞・「ユリアス・シーザー」の一場面